特集

ジグソーパズルに地域づくりを感じる

～なくてはならぬ「組織」と「人」～

東京工業大学工学部・立教大学観光学部 兼任講師
大下 茂
株式会社プランニングネットワーク代表

はじめに

手頃なピース数のジグソーパズルが好きだ。似たような形のピースの中にわずかな共通性を見出し、それらをとっかかりとして部分を組み立て、やがて全体像を描くという作業は、観察眼や構成力、それに柔軟な発想を求められるプランナーとしての思考のトレーニングにもなる。何より、地道な作業を完成させることで満足感が得られるのはもちろんのこと、程よい時間、程よい予算で楽しめるのはありがたい。ゆるやかに夢中になれるジグソーパズルは、私にとってちょうどいい按配の、ひそやかな楽しみのひとつである。

趣味から仕事を連想してしまうのは悪い癖かもしれないが、新しいジグソーパズルの蓋を開けて幾つかのピースを取り出し、それらを手にするとき、これまで関わってきた地域づくりのさまざまな場面が思い浮かんでくるのは、それほど悪くない心地がする。冬山の雪景色や広々とした青い海、あるいはネオン街のカオスに吹く風を感じるとともに、そこで出会った人びとの姿が目に浮かび、声が聞こえてくるかのようだ。

全国津々浦々にいたるまで、低迷する経済状況は地域の活力をじわじわと奪ってきた。元気と自信をすっかりなくしてしまったところも少なくない。だが、一方で元気印の地域もある。元気な地域に共通しているのは、なにより人が輝いていることだ。人が輝き、地域が輝けば、その光を観に、遠くからでも人びとが訪れる。

とっかかりとなる部分をつくりあげ、そこから全体像へと近づけていくジグソーパズルの定石は、はるかに複雑な実際の地域づくりにもある程度援用できるはずだ。本稿では、南房総館山の事例に触れながら、地域づくりをジグソーパズルに見立て、そのとっかかりとなる「組織」、そしてピースとしての「人」という視点から書き綴ってみたい。

1．縦糸と横糸が織り成す布地模様――ＮＰＯの役割分担

千葉県内には数多くのNPOがあるが、市町村別の人口規模を考慮して換算してみると、人口5万人の市に、10のNPOが活躍する館山市が県内でトップであるという。このうち、体験観光にかかわる5つのNPOの力を束ねることによって地域活力を引き出そうとする試みがあり、私はコーディネート役の依頼を受けて館山に通った。

きまってJR内房線の特急列車の、進行方向右側の窓際に席をとる。東京―蘇我の30分間は、葛西臨海公園、舞浜の東京ディズニーリゾート、海浜新都心、そして千葉港・蘇我臨海部へと展開されるアミューズメントパノラマを楽しめる。そして君津を過ぎるあたりからは、特急列車とは名ばかりのローカル列車の風情が旅情を演出してくれる。もっとも、仕事で訪れるとなると車窓風景を楽しんでばかりもいられない。小旅行と言ってもよい道程のこの車中は、5つのNPOの連携の糸口を考える場でもあった。

迷った時は原点に戻る。シンプルな思考の中に糸口が見出される。ふと手にした地図を眺めていて、あたりまえにそこにある経線と緯線に、閃いた。経緯はそれぞれ、「縦」と「横」を指す。この経（縦糸）と緯（横糸）が今回のNPO連携のヒントとなった。

館山市の5つのNPOは、いずれも個性的な集団であるが、活動の目的や活動内容から次の2つに分けられる。まず、縦糸となるのは、独自の活動の場を持った個性的なNPOであり、豊かな生態系を育む海をフィールドとする「たてやま・海辺の鑑定団」、ヨット発祥の地かもしれぬ館山の海を帆で彩る「館山外洋ヨットクラブ」、戦争遺跡など文化財を保存し文化発信拠点づくりを目指す「南房総文化財・戦争遺跡保存活用フォーラム」が挙げられる。また、横糸となるのは、ネットワークづくりを得意とするNPOであり、すなわち「たてやま・海辺のまちづくり塾」と「南房総IT推進協議会」である。これら、フィールドを持つNPOとネットワーク型のNPOとが縦糸・横糸となって織り成す布地模様こそ、この地域ならではの特色になるのではないか。その強烈な個性ゆえに難しいNPO間の連携に向けて、わずかながらとっかかりが見えたような気がした。バラバラに散らばったピースは、縦糸・横糸からなるNPOの連携組織を目指すというとっかかりを得て、おぼろげに形をとり始めたのである。

2．力を結集させる虫めがね――「地域をよくしたい」との気持ち

さて、かようにして役割分担を描くことはできたにしても、それだけでは個性あるNPO活動を結びつけることはできない。機能的にいくらスムーズさを増したところで、そもそも活動とその連携を推進するモチベーションとなるものが痩せ細っていては、面白い動きが生まれるはずもない。

そこで虫めがねのレンズのように、個々の活動を結集させ、光を集中させることが必要だと考える。それを可能にするものはなんだろうか。

ここでもまた初心に立ち返る。するとNPOにかぎらず、地域づくりに関わるすべての人びとの胸中に同じ気持ちがあることが見えてくる。それは、「自分たちが住む地域をよくしたい」という、きわめてシンプルだが強い思いであり、まさにこれこそが、地域づくりのそもそもの出発点に他ならないのである。その気持ちに立ち返るとき、光は一点に集中し、強い輝きを放つだろう。組織に強い思いが吹き込まれることで、ジグソーパズルの完成に向けた核は、ここにはっきりとした形をとるのである。

「海辺の鑑定団」のビーチコーミング。館山の海には宝物がいっぱい！

ウミホタル観察会の様子。光は人を惹きつける、子どもたちばかりでなく。

3．虹を描くプリズム――地域に活力をもたらす出会い

そして次なるステップでは、「地域をよくしたい」との気持ちによって結集させた光をプリズムを通して拡散させ、広がりを持たせる。地域づくりは、ある特定の地域内だけで完結するものではない。たとえば館山市で体験プログラムを組もうとすれば、その地形的特質から、どうしても海や山などがまたがる南房総という広域で考えざるをえないし、また当然ながら、顧客と想定される首都圏をも意識することになる。さらにテーマによっては、（たとえば戦争遺跡など）似たような資源を持つ他地域との提携や海外との交流など、世界各地のさまざまな人や場所とのネットワークを考えることにもつながっていく。

虫めがねが地域の「内」を意識し、<閉じた>範囲でのエネルギーの凝集をもくろむものであるとするならば、プリズムは地域の「外」を意識し、<開かれた>交流を生み出すことによって、新しいもの、見知らぬものとの予期せぬ出会いを呼び起こす。地域内外の人々が出会うことによって、「内」の目と「外」の目が交錯し、新たな発見、思いもよらぬ考えが閃き、地域に活力をもたらしてくれる。また、そうした外部との接触は、閉塞しがちな地方の人間関係に新しい風を吹き込んでくれることにもなる。プリズムが描き出す虹の掛け橋は、人びとを出会わせ、地域に希望をもたらしてくれるのだ。

地域づくりとは、虫めがね（結集）とプリズム（交流）とのあいだを行きつ戻りつする中に、そんな偶然性を引き込む“無邪気な戯れ”を呼び起こし、それらの取り組みを通じて、地域の魅力を磨いていくことにほかならない。NPO間の連携、行政との提携、そして他地域のさまざまな人びととの交流・連携によって、地域づくりのジグソーパズルは、次第に完成へと近づいていくことになるだろう。

「戦跡フォーラム」のツアー。説明にも思わずぐっと力が入る。

4．忘れ去られた最後のピース――欠けてはならぬ「人」の存在

だがしかし、ここにはジグソーパズルの最大にして最後の落とし穴が待っている。ほぼ完成、という段になって、欠けているピースがあることに気づき、しかもそれがどういうわけか見つからないとなったときの悲劇は、誰しも身に覚えのあることではないだろうか。不注意を悔やんでももう遅い。パズルを完成させるよろこびは、永久に奪われてしまったのである。

そんな悲劇を招かぬためにも、私たちはピースのひとつひとつを大切にしなくてはならない。どのピースも、全体を完成させるためになくてはならぬ重要な部分なのだ。

先に私はピースを「人」になぞらえたが、まさに地域づくりにおける落とし穴もここに潜んでいる。活動に邁進するあまり、地域に住むさまざまな人の存在を見落としてしまっては、のちのち不協和音が生じ、必ずや足元をすくわれることになるだろう。行政やNPOからなる「組織」も、もちろんその活動は正当に評価されるべきだが、やはり「組織」である以上は、ごく一部のかぎられた人の活動にすぎない。地域に住む人びとの気持ちのすべてを代弁しているわけではないのである。

私が地域づくりに関わってきて、この仕事を面白い、やめられないと感じるのは、休息のために立ち寄った喫茶や宿泊所、土産物屋や乗り合わせたバスなどで出会った人びととひょんなことから会話を交わし、ふとその人の心に触れるときである。「地域づくり」の旗を掲げていなくとも、それらの人びとの胸の奥には、やはりあの「自分たちが住む地域をよくしたい」との気持ちがまぎれもなく潜んでいる。地域づくりの取り組みがその心をむげに切り捨てるようであれば、たとえ一時のブームに乗ってかりそめの成功を収めたとしても、やがては行き詰まり、閉塞感を生むにちがいない。

異なる考え方を持つ者同士が共に同じ地域に暮らすのは、たやすいことではない。ときには方針をめぐって対立することもあるだろう。そんなとき、同じ考えの者だけですべてを遂行してしまうのは、たしかに手っ取り早い解決方法ではある。だがやはり、常に異なるものを受け容れるだけの余裕を持って、新しいもの、未知なるものを引き寄せてゆきたい。そうすることが、一見遠回りのように見えながら、実は地域に活力をもたらし、これからの時代にもなお生き延びていくための、もっとも近く、また唯一の道なのだから。

最後のピースがどこかへ消えてしまったあの取り返しのつかない悲劇を思い出しながら、そんなことを私は考え、今日も電車に揺られている。

5つのNPOが集結！ 最初は緊張した面持ちだったメンバーも…。

＊館山市観光協会より写真を提供していただきました。